東西集

四

和装本
へ 5
6485
2

京都帝國大學圖書之印
展陽雲林叢文庫

舊翁今
俳諧古歌

初志ゝ生徒も少年を力けて　箱

さきゝ涙の却とさ西ゝ鈴　孤舟

少ゝの家も古地の名代の水地換　方芦

仕て芳ゝさ人ゝ稗冥ゝる　鳥谷

鈴のへゝもいゝゝ子ゝき月の沈　也秀

梨ゝのおもゝの柳ゝ約今ゝ　渓芦

京都帝國大學圖書之印

へ5
6485
2

0101860222 17

枝をくゞり佛がきの筆法通ひ　文海
物ふらう相くゝ日の本板　雪岳
一切のし先ハ名のある花師　而廣
源義かまゝ長枝をまつる　梅郷
鉢牛の実り球ゆ牛ちら　於雇
義ろさかゝ三ゝ多ちる月　梅通
ちきりのをかくさるゝ思ハれく　百雪
むし歯いとへハ佛う出め事　向月

七つまある波海三古陽月如ちち　蓼徳
南おゝてハ子ろう古ちゝく　李女
下等の色も引ろう花さのり　芹舎
さゝく佛の事を越の尾　筆
一折

寅ノ十月十二日

お猿蓑庵奥行

山懸

蕨やゝ一寸ばかりとなりぬ　梅通

白鳥の年の初の月波

あらしやさゝのうへのそらく　鶏泊

八重ふかあとろくやゝ神さび月　公宗

雪あるる松柳の命かな　文海

春乃雨や志ゝふきのうす紅葉　烏谷

冬中

冬月もまれ拾もおもしろき　芥舟

冬あれく菜さへちかく柳葉屋　渓花

元日ハ一日眠き日ありけり　雲川

小原さ彼の屋ゝ京さう丸　孤柳

山もいまあるる海やさの雲　夢渡

冬雲のあさりさもちや梅薫　百魯

春風や古ゝを一連接ぶ　微綿

猫座

さびしさや少ゝ寄ての炭ゆ也　也彼

鄙ありて人乃絶まる波千奈　芳英

春さめの風のつらさも風のうち　弧峯

ふるさとの花たちかとこそ思ひ　西野

面くもり梅のほとりや莊の主　丙笑

春さめ水の上形るる船　梅郷

引ちきて岸つたり形る吟り器　詩徒

行掛て郷月ふる通りより　向月

郭めるに義をさるる梅主　素天

義行き一梅も尺に船掛　西姓

一ア人ハ偶年ふくむや冬梅　有節

芳赤き清ふ淨の紀ひ赤ふ　白石

形ふハかまの紀ふのとう　啓洲

清ひとつ吟ふ小ア布梅繁　笙玉

加茂川

雪形吟手ふ人辰ふり　月峯

酒籠の神日ふ紀ふ孔　素口

ひとりと行方しる牡丹かな　子琴
風鈴や咲きそこなひの梅　鈴雄

年内立春

世話しきる隣りの梅の蕾　虚栗
降るとしも月も不足の時雨哉　鶏山

蓑うりや雪の降る蕎の さかり哉　伊賀　嘉凡
去年の中や火ともしの山　工鈴

月旅籠出る行人影伝　巾車
年ふるあるほと梅見る山家哉　学子
ふりやんで志賀の柳の常なれ　求古
俗うりの声なる柳の糸　まけ紀
川辺のかたりて暮れ行く春哉　青雨
松ヶ崎にて笛吹を聞く哉　伊世　石行
狩人ときふりもかくさぬ雀哉　乐考

菊を出る儀の陰を花や十日菊　梅笠
彩杖や瓦を破る瓶の蓮　如拙
おもちを掃き寄の頃へ花や舟の内　松柏
松の子のとふ〳〵西の松雲気　二平
芋の子乃和尚の出子や乃の歌　昌木
水青〳〵をちら〳〵や雲の峯　杖鈴
ぶく〳〵へて雲もや山乃数　素山
青も世て汐のさしかりの月　つさを

西月芋る雲ふる雨山寺
雑もてさハ去ちりつゝ一日　李曉
蓮さく〳〵や往来さけの砂ほ西至　一清
人乃月さきて廣の雲の家　梅理
もと乃や植乃出ぬ田乃も稽雀　而后
西雲の海の乃ら乃ちのん気　烏津
西月や特しう雲さ月明り　月底
海り人も交りて乃ら乃いきみ　蓮陽

幾度春てい〻たひ起て鶯一日　江戸　由碧

鶯〻の啼きそめ初る春乃先　匡海

初雪や引こゝ先〻れ〻雪の家　卓郎

夜山や霞ち時てゝ水のくもり　抱儀

春て起く日の暮うゝや風の音　見外

ゆき雀かゝ〻て啼や初あらし　等栽

明ぬ内ハ水ゝもさひしかん子哉　多吟

苗代や今ちりそゝ風の春日　瓦村

送ら春一小鮎や春の猫まうり　泳壽

水ゝや水ゝて暮るひとつゝい　祖郷

海山ふあまる白ひや初日うけ　山子

今の春春きへ明ぬ春の里　茅古

むさ入るさほゝ飯の生る解ぬ　西吾

おもてゝ水ゝ春ちりくふ四ゝ乃と
元政法師の句ゝ春ちゝ

紫稚も芝ゝかゝり春の風　為山

白ゝとのり加ゝて梅ゝり学庵　逸湖

那珂

すゞしさや廣き庭しきに苔盆

湖見ゆる茶屋に柳の切波　楽

土持の戻りは以つも日の暮て　市隠

名月ならの人身に錆つる　水

荒隠に嵐に次男の下り築　楽

まづ路もしき初茸の色　恒

錦きて恵ちる手集りを待合せ　水

鎌倉に郭公付を萌えてまる　楽

秋の夜も娘子の手をひく尺之女之　恒

読みし志のあるし志つくとつらぬ　水

赤乃明てかゝの地震に晴の空　楽

見をおそすりおこく雑細　恒

熱かりの荒れ出るさむく　水

月の秋るに結びみくし髪　楽

世盛りに世をつゝる澤泉の町　隠

生てゝ要る切なる古歌　水
只ひとり去て居る笹の葉の　樂
本地の悟縁かゝる吉日　陽

人も此のこゝ持て蓼の味　奥　為安

出られるものゝ世も捨て　越中　仲人
鄙の宿や咲て斗りの笑の道　飯和

形代の星に仮住てゝ
亦星の雲を見やりて罪を遣ひ　為分
友菓や蒼ち見てゝ鉢用意　三有
大勇の勇て論やゝ乃目　季因
皐かんて紙もかゝめ笑の空　定尓
あり見め笑て涙ひゝり茶屋　筍也

古てかゝ茅輪も嘗る和茅　能宣　源凡

盛か減や枝の末有宮の風　梅村
夕さらの末こつの掃除哉　岐井
木の葉ちる音も出て時雨哉　而庚

春雨風面白さかな

蕨菜の一束並ひや乗り上　柳壺（カ変）
片ゝ春の明め宮ゆり林の風　悠平
初笠を懸面ひやさらの空　大爰
水も目をはなて乗りや春の面　ふ瞞

出雲や雲も出の雪乗り　丹象

片ゝ

片人のさゝぶみさや花の中　布珀（找芳）
面白ゝて根殺こうるる笠哉　三巴
京さゝき里や手到一東海　東林
英我入て志ゝゝ師笠の空　柳交
上京や稲仕ひの移遠ひ　丹駐
ゆと笠を移俗雪の戸口の朱　旦来

灯とも世八幡やむ雪や東山　如橋

初手咲て世ひろあつき牡丹哉　丹後　清茂

ふる雨をついと花笠の如　十亜

打て居て淋ち雪　橋綱　東坊

舞月と光る梅の一本　宝月

去る雨やさして行も一時り　逸舟

越て行て春の空　霧田

雪とけの一條ちあめ山の路　右小

初鄙さや舞ら山のさく　拾水

嘶りのたくる雪も有し　二風

黄色や明て雪もあるさ小菜原　如九

暮雨ちふりきて人の初拾　累丸

何ぞ見て淋ち初音　丹波　柳之

行先の芦の穂や時雨　東桃

ちの芋の中や吉野の帆の上ち　青葉
京夢待ち志ちしく休む牡丹哉　雪柳
瓜ひとつ冷して居る庫高屋哉　雪栗

屏ふかく鄭も居る茶ち哉　但馬　鬼角
大年や火ちけ立る吉ちち　野鶴
吉ちちき茶ふる之林の茶　陶く
塵町や京内中出て大根引　柳岳

蕎て有花を盗ちしき　野路
山茶花やふさひら三ちの林の上　絃石

吉野桜ふく

京人出る矣花を出合ち小ち氣　まち女
械おとの鴨ち交る梅ち哉　有木
泳る梅のちち茶ち釜の辺へ　玉陽
ち氣人のうしろふる菊ち哉　仙量
和ち吉志ち氣ち哉　お年　菫石

遠ふくけの業の又くへ分かつ　石丹

仙たて三百月又ゝやしまの方　因幡　法風

手付ひのうゝて来ゝや田植唄　秋燕

初節や猪引ゝこの東一時　鶴壺

壁ゝふりのうゝく去一　二百あれ　玉嶺

うゝゝ雨や墨のゝ分め旅祝　三芝

蓮華や雪の去山又てゝる　肅也

浪華へ出へ節のゝる氣　可丹

寒中

一日ゝ雨ゝ分ゝや唐の花　一庭

学新の寒ゝ梅又ゝ市時ゝ　小溪

紙うゝゝ袖をゝり分ゝ多祐　吳川

ゝせつゝて歳史のゝ寒格の糸　宗納

時月や雪ゝ雨時ゝ一分ゝき　一之

寒ゝゝ人ゝ月又ゝの一庭氣　和乐

春雨しつの戸出ぬ法の日　国乗
日ごとに降る雨を口ずさみ　紀鎮
大世の人も中きき月見れば　世外
水鳥と雨の降るきゝ和日乗　狗笑
蓮の枝きへきゝ猶りゝ和　義考
形ゝ出て球る秋きの夕べ　西溟
イハヤ風ふきしてもみち　玉中
坂の宿る春秋乃高ゝ日和乗　梅居

数居ても明ゝ方の和放一句　芳光
濯仏の宮八坂乃志けり乗　斗栗
蔦引ふ行中動ゝ小ゝ恨手　楠石
義男の下中都ふ水乃行　一乗
和の芳ふ志ゝう志の日御武　花蓋
今却りゝ今の鳴ありうゝ永　芹乃
市毎来て坂ゝめゝ影乗　西畴
恋ゝひゝく猫乃春ゝ川清乃　壁屋

あをまつの根ぬけて倒るる　南岳

駅路の松の里ふるのほりうま　寸風

為ゑ松ふるさとにほひ切り　伯耆　効亦

春二百とせの駅の里おもふ　葱石

今も焚柴とも志るしたりけり　杜侯

詩学たちもとて孝の小熊手　石見　青池

此永久日ながき世の牡丹哉　乃多

人志つまる夏の水おと　兼侯

移先のほさりを拾ふ旅乃哉て　乃多

さらけくもなる吸虎　侯

さぐ人乃榜とらあき舟の月　乃多

とう物をの世る掌の変え　侯

形の変るもまた毛むくの係やど　乃
四今芸舟の却るもかりすら　悟
悟面ふの私てのおもひもこと全　乃
乳のすくあき乳母のうかるく　悟
冬の夕べ糸りのへらめ銷業務　水
おも荷の牛乃泡を吹出せ　悟
米の却もさのる球昇の月落く　乃
洗ふ形も人またの時め　悟

形とく変縁の業の多掃除　乃
芸をあふる形悟さら　悟
清形つく鏡の空やうを花乃雲　水
日ふくくくふりの雲け　悟
修の業ふ風ふ炎けて通りめけ　今
物も手伝ふ多の出入　乃
さてを針を四くめ丸あんど　悟
くすり祝ひて甘ん酒乃む　乃

嘆声を挙げて自分の葉の蔭
窮乃鶴さんは自分の切株
に腰を降して拾ったお米
袖打ち振って御自乃礼
斤付し祈祷のさひて
旅人さまの足をとって永つき
雪乃百合の花さくさき自乃新
まぐ比まぐ比言ふ新緑

倭
乃
倭
乃
倭
水
倭
乃

やうくと地蔵の嘆うらきく
鶯ケ刺ちく待ち辻家
ちる雪を厭ひ金鄉から
白魚捕む土を方乃家
投出して苦しいやーき草紙布
百毎ち書ききの人、変

倭
乃
倭
乃
倭
乃

七月十五夜月を詠ず

獅子奮迅出て雲の蔕せてうつ蔕　白鷗

谷の東風梅の花ある郭さかり笠　石譜

鶯ちり先て起ちり美ちり　典秀

月ちとんの清き海のおと　ふ角

月代やくれちんと遠ふ山の根　石叟

初秋の面ほろつくや海の時ち　公眠

ちんふる傳の穴やみそさゝ　儀兄

曲ちちと羅る地やいるの花　拙年

初午やめを出てれハちの石　井資

月清しくふる塔尾の松もあき　影左

夜ちやおもふ水ふきのとう　研屯

蛍や袖ふつてうし咲ちひ　孝月

ふ魚や眼の黒きちり尺西る数　曲阜

遠坂や伊勢を招く花すすき　米女

雨さしき備中見物の笠掛　めゝ人

雪ハ蕊を沈てさひし雨の秋　左乙

明蕊や雪を木の葉の掃き分け　可大

法隆寺脇句

涼しつりして雲ゆく雪の色　播十　影詠

蕊と蕊を蕊分て蕊乃花　吟亞

雲蕊や蕊ゆく蕊仆　蒼山

きさらぎの小清水の氣　伊勢　源峰

村の世を村や陸の潤和ら　伊後　圭く

一時り来ていろ〳〵やつり雪　掌山

ものおそれするおそれ角の辺　濃孤

日蕊ゆゑ小雀明ゆり蕊の雨　飛仏

引汐や源をあてゝの寒ゆり　安路

山紙へてゝろ〳〵里や初ひゝり　春水

人あくをしみ合ふ中の涼をこの方　笠月
鉄を研磨と切るやかまつちさ　素扇

ふ出ちふふく

舟遊の一寸ちまし度の自　鶴不
ちちちく小こそ出て面を行　帰雁
降ちの今きさひしも寸牛　寿仙
風おし吹も音こらさ汐干乳　松目女
梅二木彩日のつと出りて見　即住

立ちしさる角力の吸ちを行　蕪子女
おしうち出て波ちせめ清水哉　素秀
反乃赤の面ちる言ふ明ち行　梅墨
ひつもさるるあたたかて年男　撫尾

尼ち崎ちり丹ち春ちく

芝風やちふち長く旅のうき　含桂
面の為て象の あつちる長寿哉　菓宇
さハくと鼓を吹ちて寿ち面　八朱

ふるさとの人のうたふる物語　定家
黄昏の駒けハ海きよ乱れ　宣白
やふ人をつなぐたちめ里方丈　扶桑
秋ちかや伏柳の筋乱たる　唐秋
燃ふる風の時わかぬ　笠洲
掘さい紅葉て西月の良性の　芦葉
乱ちも指もすんて去方月　為川
幾秋や他人を交ふ生しし　玉水

義士や拾子拾くて傳ふる　寄女
猟人や出ぐ掘ふる鹿の味　雀令
義ハ出ぐ弓の手あり時雨　羽雪
吉山ハ出ぐとのたる山　掘律
夕ちけや結鉢出る吉千鴨　掘鈴
七ふり変てとり久ふ義の姿　竹等
友乃者く後引ふ三ふ秋拾　冨山
掘先く雪の義ふ世ふ武　雪鶯

薄らひや桶もたらひも菖蒲水　吉村
茶を汲て出る手明りは扇哉　蘂後
蕪村
葉も茎も出水の跡や夕すゞみ　文涌
家晒す俵の小夜や月と兎　細猿
すゝしやと人とけ出て夜の深し　菜年
広庭や猫に追るゝ秋のてふ　池雄
谷の月一枚橋や吉野栗　柳塘

搖へりも廿めに艶ありや年栄　雲波
纏のけさ俵に菜をそふ蕪かな　飛弟
鎮飾の羽も焼くらき草の風　松汎
雲取にも花の日の草葉や牡丹哉　茶雪
周仿
行遠に人乃花しぼる清水かな　子ゝさ女
年寄に我り咲りたし菊の宿　末若
撫子の我に寄添しかんざし哉　秋人

ものひとやをおりたる　夕旌
あをとふ　ものとり　放生　次午の月　甚風
水雪乃雪のけ　潮る日　初の条　都交
取ちく及古の中乃　夏霜ふる　看年
書物乃条ものを　かちふ　ちう　儀道
為一日ひとりづつ　へうちかんの条　玉壺
ゆらゆ山ふ　ものを
日ふつ　ちて　ガを　ちう　ちく　撫乳　素兄

つ乃ぬけ　ものを　論引　ガの条　素芳
ものを　へて　子ふ　曳せる　ものを式　子健
ものを　いふ　ものを　論ものり　丁一相　冥考
ガふも　雪ふ　ゆりて　ものを　ガをもふる　已午
源ちる　葉も　ものを　ものり　ゆきつる　晋寅
咲ふ　ものを　ふ　ものを　ものを　ガの　ちる　ガ　ものを　天苔
水雪も　ガふ　ものり　ものを　月　里暁

墨うつ雲おもむきもち紙ス巻き式　紙屋

子角屋の旅思ひつく四月条　竹斎

小雨色蒼る静かなる中の孔　祖井

面合花を尺と歩きるや咽り尺　可炊

風の来て寸り尺ここるる蓮尺部　百川

初秋やふくらてて尺西る法乃面　市原

ちゝ原の赤家

不二尺寸る初月とけめ笠部　楽

四句

うゝ言もちく肥く在る牡丹条　砂水

山水うける池の寸ゝ記　茶雲

旅人乃尺医り酒ふ辞つまて　水

一寸ほ少けめいとの生結　雲

蛙ひりのもとと記め三日の月　秀

洗ふく小業の雪ふ志ゝく　雲

ちゝめ子小袖ちくらゝ辻角力　乎
午时ろてゝやゝ後のさひし紀　雲
服服みちらん縁組のとのゝ　乎
結ぶ〜てもまふいとめ髪　雲
淮項の舟ちら面れ時掃屋　乎
ちん あや先の子ら咲ちり　雲
ちゝさゝふ形て借る菩ち生　乎
大のゝ浪ちゝ上る舟合　雲

枝ちゝ折ちふ笠の海めゝ　乎
月ち面ちも反ちゝ雲ちる　雲
蕨ちゝの花ハ自ひみちゝ雲き　乎
鶯人たゝめ元ち雲ちゝか　雲
俤利ちき素通りの俄俤茶　雲
新型醤油ち面ひめ一ゝく　乎
反出ちうちゝ世弁ち書けく　雲
うかちゝ世ゝめ生命の友　乎

業風ふきまくれば伶人あり　雲
栗市の女房すさまじき　水
鼓吟ずる人の指物を窺ひて　雲
包まれて通らしむる風の金　鳥
海龍王寺とありたる南都絵　雲
今は百石世界ふ市　鳥
淀目ふ箔の上をを彩色し　雲
萩を乃ふ乃ふぞあるめる　鳥

年のくれを祭りの家の乃すて餐　雲
日ふ雲くる釜の乃あけそ先　鳥
掃除をする先のふるひとより童　雲
鈴く風の工合あるふ　鳥
源氏も花ふ鈴ぬる夕くれき　雲
去乃日ふ乃ふ乾く井田　水

仲秋名月

月三度雪あつけて杖乃雫　渡弥　梅塵

雨とあゝ一歩あゆへく雲乃足　半谷

山水や雪の中なる鶴乃おと　路池

芋乃種のかゝく吉れ今ふ星乃　蔣池

つゆゝ芋のとちく吉くとう乃　布線

行林やひとり二人の拍子の紀　筍丁

書因尺徒ゝ乃猫ともり足　白紛

年内立春

去年とと思ひあかゝや冬籠　何波　茶霞

一寸日乃さして芋ゝや雪の乃　夷岳

ゆゝ乃ゝや風の吹めくゝ乃上　平蓋

凌雪や土乃白むのほつと寄ゝ　龍年

初梅ふゝ乃ゝ雪の吉つゝ乃乃　羅邨

春ゝの戸ふかゝきりあるゝ柳れ　樗風

ものとゝ矢せめ藪柳や梅の花　月古

廣島に着て入り日の薄明り　梨言

良東お後凉庵

雲のけのありて見あぐの月雲　雲丈

やすて雲ふる雨と雷雲夜の月　梨二

黄昏やまさきさきき井戸の雨　路雄

さへつりふ蜂蜂の尾ふる小雨哉　杜鵑

裏表あき木振ありもの雲　哉二

乃ひるこそ雲もあるめ芒の糸　無言

蛇ぬけあく抜殻生ふくの糸　嘆蓮

行きもつほとふ松を月と山　莊表

去られ生き修ありり桃乃茶　一潭

茶もつく飲くのそく水生の秋　思風

芋旅

白川の枯風乃舟の吹雪うれ　美像

お降に雀ちらふつの井　仲与　宗雪

くもの目ふ人の殘りさるもかへ　肥前　悠く
うつりとちまゝ拂ふうれる空　文旨
吉麦乃中ゆくたつや春の風　急曉
一雲ふゆくまるゆや春乃雨　山雨
立ゆの相風さけ前る搖くの糸　岱嶺
五月雨花ゆもむる琴の穴　筑前　斗丈

物すゆ先藤つきあ菖の宿　宇逸
料理坊の降りくや藤の梅　木翁
ちちんぽりと霧の雫て福寿草　石外
傳くゆく拂乃泉さひし枝の風　豊後　昊石
竹藪の手ゆて竹藪の家　筑後　駝て
さゝら孫小雪ゆ山の霧　梅可

堀ふ色りのなかに紅ありて梅の花　青年

旅の友や祖師の詠ても吟　木屑

初東風ふのけけ色や鶴の毛の翅　日向　双鳥

咲うけて等度聚く牡丹の形　青木

杜若ちらて蒼ふもとり色里　垂牛

春雨や信乃の山のひと元生　可昇

寸代といふも二月三日哉　祝岳

新安寺にて

きりふきふきて三月の雨梅柳　天水　去湖

仮ふしてさて命は仮や春日雲　溪雲

降らりも鶴を雲の心一雲孔　波月

春寒しかや鶴の毛枯の角　拾山

水仙や神も八月き咲きまる　若圃

鶴時や思ちめ方ふ雲のやま　聖鶴

さくらふちなふ人ちふ水色ち　松屋

峰つゝく雲さゝぐや村雨　玄子

鶯の鳴かぬ日もなし梅の花　廣甲　李女

河内の国うち越ゆる
中の河内といふ所なり

お籠の前の御使すゝめ雪の夜　於永

巻中をくすすめ給ひ　仝

嘉永八卯年乃月

富田藏書